

二浦上四番崩れ

「浦上四番崩れと浦上キリシタン流配」

一八五八年（安政五）に、「修好通商条約」が、米、蘭、露、英、仏との間に締結され、長崎に外国人居留地ができ、一八六五年（元治元）に外国居留民のための教会がパリ外国宣教会の宣教師によって建立された。これが大浦天主堂でフランス寺と呼ばれていた。

二五〇年間、浦上のキリシタンたちは弾圧の中で代々信仰を守ってきたが、浦上に住むキリシタンの人達が大浦天主堂を訪ね、教会のプチジャン神父に近づき耳元で言った。

「ワレラノムネ アナタノムネトオナジ」

「サンタ・マリアのご像はどこ？」

弾圧のなかで潜んでいた信徒が、ここに初めて神父との対面を果たすことになった劇的な事件であった。これによって浦上の信徒は、指導司祭を得て、幕府の目をはばかるとはいえ、四つの秘密教会を持ち、ミサ、告解等が行われはじめた。

浦上の信徒が、各地へ流配されるようになったのは、歴史の上では「浦上四番崩れ」といわれている。この「崩れ」は死者の埋葬を檀那寺でする事を拒否したことが発端であった。

キリシタンによる自葬が数度に重なり、壇那寺との関係を絶ちたいとの申し出は、幕府の寺請制度に対するキリシタンの抵抗であった。

その後奉行所は、浦上キリシタンの内情を探ったブラックリストで、秘密教会・聖マリア堂へ嵐の夜に踏み込んだ。一八六七年七月十四日（慶応三年六月十三日）のことであった。

キリシタンの捕縛、投獄に対して、各国が抗議したが聞き入れず、一八六八年（慶応四年四月十七日）太政官達により、浦上キリシタンたちは各藩へ流配されることになり、四千人近い人が全国二十藩へ預けられた。

◇ 名古屋藩へ流配された浦上キリシタン

名古屋藩（現・愛知県）に預けられたのは、主として浦上・家野郷城之越の人々三百七十五名であり、第一回の「教徒引渡し」の戸主男子六十三

名は、一八七〇年（明治三年一月五日）に立山役所に集められ、大波止で乗船させられ、瀬戸内海を経て大阪八軒屋という船着場に着いた。一同は腰紐で数珠つなぎにされて歩かされ、六日目に名古屋に着くと、広小路の牢獄や西本坊（西本願寺別院のこと、当時は西掛所と呼ばれた）につながれた。その後、七ツ寺境内の建物にも板囲いの上収容された。四度にわたる流配通達で、尾張藩預けは婦女子も含め最終的に三百七十五名となった（青山玄「浦上キリシタンの名古屋藩預け」『キリシタン研究』22）。

◇金沢藩へ流配された浦上キリシタン

金沢に流配されることに決まった人々は、二つのグループに分けられた。一つは戸主を中心とした百十四名の男子で、着の身着のまま連れ出された。一八六九年（明治二年十二月四日）に船に乗せられ、瀬戸内から数日後に大阪着。そこに金沢の役人が三名ほど来ていた。三、四日、滞在したのは木津村の願泉寺だった。その後、淀川を進み伏見へ。琵琶湖の渡船のあと、海津着。その後、大雪の中を陸行して、中山から越前、そして金沢

へ向かう。

金沢に到着すると、彼らは通称「向山」といわれる卯辰山に収容された。卯辰山は藩末に開発が進められ、織屋、養生所（病院）、撫育所（救貧院）、茶屋、揚弓場、馬場、芝居小屋、湯坐屋（葉湯施設）ができていた。ただ、キリシタンが収容された頃は、開拓の施設もさびれた廃屋となっていた。一行は織屋といわれる二階建ての長屋に連れてこられ、老人は下に、壮年は二階に住むことになった。間取りは広く、青々とした新畳が敷き詰められ、布団は山と積まれ、火鉢には炭火をさかんにおこしてあり、鉄瓶の湯は音をたてて、たぎっている、という厚遇に一行は驚く。

一日三、四回大声をあげて、お祈りをするのが日課だった。食事はそれほど悪くない。量は一食分が黒塗りの碗に一杯。副食は朝夕茄子のぬかづけが三切れ。昼は水のように薄い味噌汁、時に鰯の塩漬けか鰯の粕漬けがでた。百余名の第一陣の後、十二月八日、後続のキリシタン四百十名が金沢藩の猶龍丸という船に乗せられ、玄海灘を通過して、七尾（所口）に十二月十二日に到着した。その後大雪の中を歩いて、卯辰山の湯坐屋に二十二日

二十三日に收容された。

織屋、湯坐屋にそれぞれに收容されたキリシタン達は役人の目をぬすんで、連絡を取り合っていた。翌年になると、はしかが流行して四十二名の子供が亡くなり、その後腸チフスが伝染したが、病院での手当てで死者は三名のみですんだ。キリシタンたちはただ祈りに集中する日を過ごした。

◇説得の強化

八月に入ると金沢藩の仏僧による説得が始まった。松任・本誓寺の松本白華、永順寺出身の石川舜台等は漢訳の聖書を読み、キリスト教の教理にも通じていた

高僧たちの棄教への説得は次のようなものであった。

―神道、仏道、儒道の道知らぬから邪道へ迷い込んだのだ。教諭により改宗してはどうか？

「只今改宗致シマス程ナラ国元ニオイテ改宗ヲイタシマスル」

―天子様と異国人が軍さをする事になったら何方の味方をするのか？

「私共ノ宗門切支丹ニテハ軍サセヌ約束デゴザリマスル」

当時の最高の高僧も、無学であつても信仰強固な農民たちの英知には齒がたたなかつた。説得側の仏僧、松本白華の遺した「備忘録」によると、キリシタンに対する説論は一八七〇年（明治三年正月）にはすでに始められていたという。

説論に応じない収容所の中心人物数人を「奥のときえ」といわれる二重柵をした十六間に四間の牢獄の一棟に打ちこませた。数日後、十二月の雪の中に今までの着衣をはぎとり、袷一枚着ただけの寒ざらしにしたりした。

「奥のときえ」に収容されたキリシタンに当時、地元金沢の東長江の人が、近づき話をしたことが、一九八八年の聞き取りから分かった。長瀬清角氏が祖父から子供の頃に聞いた話だということだった。真冬ではなく、村人が牢獄近くで畑仕事をしていた時期だという。長崎弁なので分かりにくかったが、「早く帰りたい」と話していたという。このように、土地の住民との接触は、それなりに存在したのだった。

浦上のキリシタンを金沢藩が卯辰山に隔離したのは、市中の収容施設では人心の動揺が懸念されるというものだった。当初の計画では市中（西町

四番丁)であつたものを、強引に卯辰山にしたのは、藩老、奥村栄通であつた。

このように、周到な藩の処置も、結果的に藩の上級武士にキリシタンの姿を深く心に刻ませる結果になつた。かつて高岡奉行として庶民に慕われた長尾八之門という武士が、一八八〇年(明治十三)にアメリカ人のトマス・ウインより洗礼をうけた。長尾八之門は現在の「北陸学院」の前身の愛真学校の設立に多大な貢献をした人である。

◇ 大聖寺藩へ流配の浦上キリシタン

大聖寺藩へは、一八六九年(明治二年十月二十五日)、太政官より浦上村のキリシタン五十名を預ける指令が届いた。総員八十三名、中には長州に預けられるはずの二家族が加わつていた。十二月八日、長崎を出港して大阪に着き、兵庫に引き返して役人の到着を待った。一週間ほどたつて大聖寺の役人に引き取られ、大阪、伏見をへて大津に着き、琵琶湖に沿つて陸行し、大聖寺に到着したのは一八七〇年(明治三年一月十二日)であつた。町の東手の庄兵衛谷の射的場の長屋に收容された。『信仰の礎、浦上信徒総

『流配百周年記念』（一九六九年）には、「収容所内では別段責めを受けるのではなかったが、食物の不足には一同少なからず悩まされた。二月二十一日には源三郎以下三十三名が富山に送られ、残った者たちが心細さを募らせる中、間もなく改宗の説得が始められた。説得には仏僧が当たって、五、六名ずつ本昌寺という寺に呼び出し、改宗を迫った。しかし、皆気強くつっぱって応じなかったので、三日の後には一人一人引き分け、藩内の各寺院に預けられた。寺院預けになると、待遇はその寺院、寺院によつて異なり、親子兄弟のごとく厚遇されるものもあれば、牛馬同然に酷遇される者もあったという。」と記されている。大聖寺県（旧大聖寺藩）を合併した金沢県が石川県と改称した一八七二年（明治五年六月六日）に大聖寺に流配されていた全員（五十名）が金沢へ送られ、卯辰山の養生所跡に入れられた。養生所は、一八六七年（慶応三年六月）から始まった卯辰山開拓の主な施設として建てられた病院であったが、移転して当時は空き屋になっていた。

◇富山藩へ流配の浦上キリシタン

一八七〇年（明治三年二月二十一日）には、大聖寺から三十三名、金沢から九名、合計四十二名が引き分けられて富山に護送された。

富山城下の南方、上新川郡の合田の湯と経力の湯に集められたが、転宗させるために、三回にわたって新川、婦負両郡の真宗寺院二十九寺に預けられ、その寺々で住職が改心するように説得した

四月十日には中沖の西光寺へ二十五名、五月一日には婦負郡古里村永沢の西光寺ほか三か寺へ九名、五月二十八日には同郡神保村上吉川の薬入寺ほか七か寺へ八名（大谷派八か寺、本願寺派二十一か寺）預けられた。七歳以下の幼児は母親と一緒にだったが、それ以上のものは夫婦、親子別々に預けられた。

四十二名の頭とみられた重次郎は神保村上吉川の薬入寺に、妊娠中の妻きくと四歳になる娘とめは古里村長沢の西光寺に、また、きくの兄善次郎は塩の光慶寺に預けられた。

男は十五歳以上、五十九歳までは犬のように鉄輪をかけられた。奴隸のように酷使され、境内から外へ出ることが禁じられた。朝は粥、昼は味噌汁、

夜は香の物、七日に一度塩魚、三十日に一度浴場と定めてあつたらしい。

富山藩でも神保村上吉川薬入寺の記録を例にとると、五月二十七日富崎の本覚寺四名、安田の中堂寺一名、八町の勝法寺一名、布目の長専寺一名、岩瀬の浄光寺一名、塩の光慶寺一名が転宗しており、転宗者が出る度に富山藩庁から藩史が来て、信者の鉄輪をはずした。

六月五日には、頭の重次郎もついに転宗した。重次郎は転宗すると身ごもっている妻きくの介抱のため、十五日間西光寺へ通いたいと願い出、聞き入れられて西光寺を訪れている。

六月二十日、西光寺にいる重次郎の妻きくに陣痛が始まり、住職の慈慶や寺方の女たちが介抱したが難産で死去、二十二日に長沢焼場（村の火葬場）の一隅に埋められた。

◇ 英字新聞への投稿の波紋

一八七二年二月二十八日（明治三年十二月八日）付の『ジャパン・ウィークリー・メール』（THE JAPAN WEEKLY MAIL）という横浜の英字新聞が、

キリシタンたちの様子を報道した。

「六百人以上もが豚小屋の豚のごとく、獄屋の二階につめこまれている。囚人の中の多くの幼児も天然痘の伝染病でほとんど亡くなった。南京米のおむすび一個だけのひどい食料事情だ。」

少しばかりの誇張があるとはいえ、関係者が読めば、金沢藩の卯辰山の湯坐屋の様子を活写しているとすぐに分かる。

この投書記事の載った新聞は、在留外国人にセンセーションを巻き起こすとともに、英国公使館がとりあげた。日英外交交渉のなか、金沢藩については現地視察を要求された。

一八七二年（明治四）二月二十二日、金沢の卯辰山に英国新潟領事代理トウループと外務少丞の水野良之による視察があった。

視察後、キリシタンの対応に改善が見られ、キリシタン達は小川のドジョウを蒲焼きにして卯辰山のふもとで売り歩いたり、手づくりのぞうりを売り歩いたりできるようになった。

このように外国人の視察、外務省による改善指示があったのは、前記したように、横浜の英字新聞の投書からだった。

◇ 高札撤去

キリシタン禁制の高札撤去は、一八七三年二月二十四日（明治六）、太政官布告第六十八号によってであつた。三月十四日、浦上キリシタン釈放が太政官から命ぜられ、北陸のキリシタンも四十〜五十人ずつの組に分かれて、徒歩で神戸へ、その後、船で長崎へ歸つた。このようにして、六月まで帰還が続いた。維新政府がキリシタンの高札を撤去せざるを得なかつた理由をまとめると次のようだ。

- 一 国外からの抗議、要請
- 二 キリシタンを預つた諸藩が、財政上の負担が大きいと政府へ苦情を陳べたこと。
- 三 今までキリシタンは極悪非道な鬼か天狗と思わされていたが、諸藩の人々の耳目に触れて彼らが純朴な農民であることが分かつたこと。
- 四 流配されたキリシタンを改心させることが困難であること。改心して



「定」禁令高札

裏書「益田郡尾崎村の墨書
現在の岐阜県益田郡萩原町大
字尾崎」

長崎へ帰郷させても、再び信仰生活に戻ってしまうなど、宗教弾圧の継続は不可能と政府は判断するしかなかったこと。

二月二十四日の高札撤去は「キリスト教の黙認を事実上実現させた」だけのものではあったが（現代の信教の自由ではない）、徳川幕府が「祖法」として弾圧し続けたキリシタン、加賀藩などは「根切り」宣言までしたキリシタン、九州地方の浦上をはじめとする三千人以上の犠牲と無抵抗の抵抗により信仰と良心の尊厳を守り通したキリシタンの勝利であった。これこそ、まさに宗教史上の奇跡ともいえる復活であった。

新政府による信教のある程度の自由は、一八八九年（明治二十二）（大日本帝国憲法第二十八条信教の自由規定）の成立まで待たなければならぬが、高札撤去により二百七十五年に及ぶキリスト教禁教と弾圧は終息した。

長崎キリシタン流配に関する北陸の『公文録』より

御預異宗徒人員届 石川県 明治六年三月十五日

元金沢県御預異宗徒 五百二十六人並 出産ノ者 五十五人

元大聖寺県御預異宗徒 四十四人並 出産ノ者 一人 (合計人員 六百二十六人)

内

元富山県へ引送人 九人、死亡 百二人、御引渡ノ折途中ニテ脱走 一人 於当県脱走 一人

復籍 三十三人、

内 壬申八月九日發送 十人、同九月十二日發送 二十二 明治六年二月二十日發送一人

元今残人員如左

註 改心 不改心の分別なし 總計四百八十一人 他脱走一人

内

二百四十一人 男 二百四十人 女

右ノ通相違無之候 以上

明治六年三月十五日

石川県県令 内田政風

史官御中

御預異宗徒人員御届 新川県(富山藩)

御預異宗徒人員御届

新川県(富山藩) 明治六年四月二日(公文録)

旧富山藩へ御預け相成候長崎浦上村異宗人員調べ書
可着出旨三月中以雛形御達二付取調候処別紙ノ通御
座候此段御届申上候 以上

明治六年四月二日

新川県 参事 成川尚義 新川県参事 三吉周亮 新川県県令 山田秀典

史官御中

御預異宗徒 四十二人並出産者四人

内

死亡 五人、脱走 無之、編籍 無之、復籍 無之 合一人 減、

現今残人員(注、編集部個人名省略) 合四拾壹人

右之通御座候 以上

明治六年四月 新川県

山田光雄著 『帰ってきた旅の群像——浦上一村流配者記録——』より